

全労済協会 慶應義塾大学経済学部寄附講座

「公共私による新しい福祉価値の創造

～新しい福祉価値をどのように生み出すか～」

第12回 2022年1月11日

「人と森の関係から学ぶサステイナブル社会」

Arch joint vision 代表 池田憲昭氏

■自動車産業の2倍の規模を誇るドイツの森林・木材産業

私は日本の大学卒業後、森林学を学ぶためドイツへ留学したのを機に、シュバルツバルトに25年間在住しています。森や木などの自然環境、木造建築、サステイナブルについて研究し、新型コロナの流行以前は、日本の企業や大学を相手に現地ガイドやセミナーなども行っていました。

現在、私が住む美しい里山は自然豊かで静かな場所であり、いつでも日常の喧騒から逃れられる「身近なパラダイス」です。そしてこの楽園は手つかずの自然ではなく、森と共存する人の営みによって築かれています。

里山を管理する地元の農家は、林業に酪農、また観光客も受け入れています。ドイツで人気の「森の幼稚園」は、遊具のない自然の中で想像力を巡らせながら遊ぶことで、学びへの意欲や集中力、注意力、社会性を育むことができます。森はまた、再生可能なマテリアルの供給源でもあります。ドイツには職人制度が整っていて、建築に限らず、家具や楽器などさまざまな分野に、木材の使い手が存在します。

森林から木材加工までの流れを「森林・木材クラスター」と呼び、ドイツではクラスター従事者に関する調査が2004年に初めて実施されました。結果、132万人の国民が従事していて、国内の基幹産業である自動車産業のおよそ2倍にのぼることが明らかになりました。クラスターのほとんどは零細企業ですが、経済に非常に大きな影響力をもたらすことがわかったのです。

■似て非なる林業と森林業

現在、世界に原生林は数えるほどしかなく、大半の森林は何かしらの形で人の手が入られています。そして森林のマネジメントは、林業と森林業に分類できます。林業は一斉に同品種の木を植樹し、栽培して、伐採するサイクルを繰り返すことで、木材の量産につなげています。対する森林業は、元の自然林の生態系を生かします。品種も成長過程も異なる木々が育つ中で、状況を見ながら大きな木から伐採し、絶えず循環させる仕組みです。シュバルツバルトの里山は現在、森林業の方が多くですが、世界的には林業によるマネジメントが圧倒的です。

森林業を学んできた私からみると、林業は自然の持つ複合的で多様な構造を、人間の手で単純化させているように映ります。林業と同様にひとつの土壌に同じものを一斉に植え、収穫しやすいようにしているものに畑がありますが、この手法には病虫害や環境にまつわる問題が常につきまといまいます。

林業に限らず工業や商業でも、人は複雑なものを単純化させて産業を発展させてきました。数年前、書籍の執筆のために脳科学の本を読んだときに、人の脳は高次に発達したことで多くのエネルギー

ギーを必要とするため、複雑なものを均質化、単純化させてエネルギーの消費を抑えようとする
ことを知りました。

多様で複合的な自然のあり方をそのまま受け入れて活かす森林業は、かえってシンプルな手法と
もいえます。というのも林業の考えを当てはめると、森林業は管理が難しく見えますが、うまく運
営すれば植樹の必要はなく、病虫害の被害も起こりにくい。実は省エネな手法といえるのです。

現状、日本の森林は林業型が大半ですが、森林型に変えていく術があると思います。一斉に植え
られた木々のうち、生長状態のよいものを残すようにして伐採していく方法です。長い時間をかけ、
繰り返していくことで、多様性を取り戻すことができるでしょう。

■豊富な資源を生かし切れていない日本の林業

日本は、各国の専門家が羨む森林大国です。ドイツの 1.3 倍の日射量に、2 倍の降雨量、火山灰
などにより豊かな土壌を擁し、森にとって理想的な環境だからです。国土面積は同じくらいですが、
森林の占める割合はドイツが 3 割に対し、日本は 7 割です。また森林の持続性を保ったうえで伐採
可能な木材の量を試算したところ、ドイツは年間 8000 万 m³ に対し、日本は 1 億 m³ にのぼる。し
かしながら、ほとんど資源を活用できていないのが現状です。

豊富な資源を生かすカギは、道路にあります。ドイツでは森林基幹道と呼ばれる、木材生産から
交通、散策にまで使える道を、等高線に沿って巡らせます。けれども日本の林業では、木を伐り出
すためだけに、狭くて細い道をつくる場合がほとんどです。ジグザグと入り組んでいて、重機を使
わないと伐採した木を運ぶことすら難しい。コストのかかる方法で、日本の林業はここ 50 年ほど
採算が合っていません。行政が補助金で支えるいびつな構造になっているのです。

日本でも森林基幹道を敷設する動きがあり、私はいくつかのプロジェクトに参画しています。湿
地や土砂崩れのリスクが高い場所も幹線をデザインすることで問題を回避し、生活者と共生する森
づくりにつながっています。また森の持続性は天然更新（植栽に頼らず樹木の再生を図ること）が
ポイントになりますが、鹿の対策や伐採のし過ぎによる笹の繁殖が原因の場合もあります。

日本では 150 年前にドイツで森林業を学んだ本多清六らが明治神宮で広葉樹の森づくりに取り
組み、現在の姿は当時の遷移計画のとおりです。ほかに伊勢神宮など、日本も林だけでなく 100 年
単位で育てる森のモデルが存在しています。

■尊厳を意識し自然と生きることが共生社会を築く

私は、人間が森と積極的に関わり、自然と共生する暮らしを築くことがサステイナブル社会の基
盤になると考えます。背景には“尊厳”という、人間に生まれつき備わる資質が関係しています。と
ころが資本主義経済を軸に発展してきた近代社会は、尊厳を軽視し続けてきました。その証拠に、
世界では富の一極集中が生まれ、格差と不平等をはじめさまざまな社会問題を生み出しています。
アダム・スミスが説いた“（神の）見えざる手”は、寓話に過ぎなかったのです。

また近年、ダーウィンが説いた競争や自然淘汰による生物の進化は、多様な種の共生や協力もあ
って遂げられたものだという説が有力視されています。森林の多様で複雑で複合的な環境は、人間
の尊厳を大切にしたい共生社会の実現に向けての重要なヒントになるでしょう。

<文責：全労済協会調査研究部>